最優秀賞（釧路地方法務局長賞）

守られる人権

釧路町立別保中学校　三年　坂本　茉那

皆さんは自分の人権が誰かによって守られたという経験はありますか？人権が侵害されたときは、傷つくので良くわかりますが、人権が守られたということはあまり体感しないものです。

ですがそれは、本当に幸せなことの証なのではないのでしょうか。なぜなら、幸せなときは幸せが増えてもわからないからです。

気付かぬうちに小さな幸せが降り積もり、それがやがて大きな幸せとなるのです。そして、人権が守られたこと、すなわち誰かに助けてもらったことの幸せに対しては気が付きにくいのです。私もそうでした。元々持っていた幸せに気が付かず、周りの人が手を差し伸べてくれたことで後からその幸せに気付くことができました。それを教えてくれたのは私の父でした。

小学四年生の冬、私が十歳になる一ヶ月前のことでした。いつも通り目覚ましで目が覚めると、部屋のドアから目をぱんぱんに腫らし涙を流す母の姿が見えました。そして、母の口から「パパが事故に遭った」と告げられました。父は漁師で、夜中に漁に出た時に海難事故に遭い、帰らぬ人となりました。頭の中がパニックになった私は夢かと思ったけど、涙を流した母に抱き抱えられた時に夢じゃないんだと自覚しました。

家に親戚が来てはみんな泣いていました。その日の記憶はほとんどありません。ですが、唯一鮮明に覚えているのは、最後に父が着ていたジャンバーを見た時です。それは、迎え火をしている時のことでした。迎え火は海岸地方の人たちの習慣で、海難事故に遭って行方不明になっている時に行います。私が聞いた話では、暗い海の中でも火の光を見つけて、帰って来られるようにという願いが込められているそうです。その迎え火をしている時に、父と同じ船に乗っていた人から、父のジャンバーを預かりました。それは、私が最後に見た父が着ていたジャンバーでした。それを見た時が一番辛かったです。このジャンバーを着て行ってきますと夜遅くに出て行った父はもういないんだと現実を突きつけられた感じがしました。

そんな私は一週間学校に行けませんでした。なぜなら、この事情をみんなは知っているのだろうか、知らなかった場合自分で言わなければいけないのか、そしてもしみんなが知っていたら、みんなはどんな顔をして私を迎え入れるのだろうか。かわいそうとか、お父さんいないの？とか言われたらどうしようなどと、勝手な妄想が頭の中を飛び交っていたからです。ですがそんな時、その時の担任の先生に「気持ちが落ち着いたら学校においで。みんな待ってるから。」と言われました。私はその言葉にはっとなりました。みんなは自分を待ってくれているのだと気付かされたのです。それから私はいつも通り学校に行くことができました。学校には前と変わらないみんなが私を笑顔で迎え入れてくれました。特に何も変わったことはなく、いつも通りのみんなでした。私はそのことにとっても救われました。

そしてそのときの私は、辛いことがあってもその分、支えてくれる人がいることが幸せだと感じました。大声を出して泣きたいほど辛いはずなのに常に笑顔で接してくれる母や、事情を知っていながらかわいそうと思わず普通に接してくれる友達など私の周りには私を守ってくれた人が沢山います。そのことが、人権について考えている今、自分の人権が周りの人たちの手助けによって守られたと言えるのです。

世の中の人々は人権が侵害されたことに目を向けがちです。ですが、誰かの手助けによって人権が守られたという人も多いのではないのでしょうか。辛い時は今自分が持っている幸せに目を向けてはいかがですか？すると新しい幸せに気付くことができるでしょう。そしてその幸せはあなたにとって人権が守られたといえるのです。私も今持っている幸せに目を向けて、小さな幸せにも感謝ができるような人になりたいです。